

開催報告

第11回日本医療マネジメント学会学術総会

第11回日本医療マネジメント学会学術総会 会長 米倉正大 (国立病院機構長崎医療センター)

2009年6月12日(金)、13日(土)の両日、長崎ブリックホールをメイン会場にして、第11回日本医療マネジメント学会学術総会を開催させていただきました。

今回の開催につきましては、長崎の梅雨と、新型インフルエンザの発生による影響の心配をしながらの準備となりました。しかし、皆様のご協力のもと、そのどちらも大きな影響なく、事前登録演題数は820題を超え、皆様の関心の高さが窺えました。その結果、参加者数は3,300名(事前登録2,200名、当日登録者1,100名)を得ることができました。

各地の医療機関で、新型インフルエンザ対策に忙殺されているなかで、人員を割いてご参加いただきました皆様に改めて感謝申し上げます。

今回のテーマを、「新しい医療連携構築への展開—医療・保健・福祉の地域活性化を目指して—」とさせていただきました。演題を分野別に見てみますと、医療連携関連180題、クリティカルパス関連74題、医療安全200題、人材育成65題など、皆様の関心の高さがわかります。また、今回の学術総会より、演題に対して、全て査読委員による適正な審査をさせていただきました。数演題につきましては、修正や、ポスターへまわっていただきました。お手数をおかけした会員の皆様に、お詫びと感謝を申し上げます。おかげさまで、内容的には、年々充実した研究発表となっており、皆様のご努力の賜物と思えます。

学術総会1日目の招待講演1は、アメリカ在住でコラムニストとして高名な李啓充先生に「診療報酬を医療の質に連動させる試み：米国P4P (pay-for-performance)の現



招待講演 (李啓充先生)

況と問題点」という演題でご講演いただきました。今後の医療は、質を担保し、高めていくためにも、評価が必要で、それが報酬に反映されていくことが重要と感じられました。

つづいて、会長講演として、「地域における拠点病院の役割を考える」と題して、私が普段考えている点を中心にお話をさせていただきました。長崎県は多くの離島を抱え、少し特異な地域ではありますが、長崎医療センターがこれまで行ってきた「地域の拠点病院としての役割」を中心に話させていただきました。このことから見えてくるのは、まさに地域における医療マネジメントが十分に機能していない日本の状況が今日の医療崩壊を招いているとし、その解決のいくつかを提案させていただきました。

教育講演としましては、まさに、前日にWHOがフェーズ6に引き上げたばかりの今ホットな問題として注目されている「新型インフルエンザの動向」と題して、国立感染症情報センター長の岡部信彦先生に、ご講演いただきました。

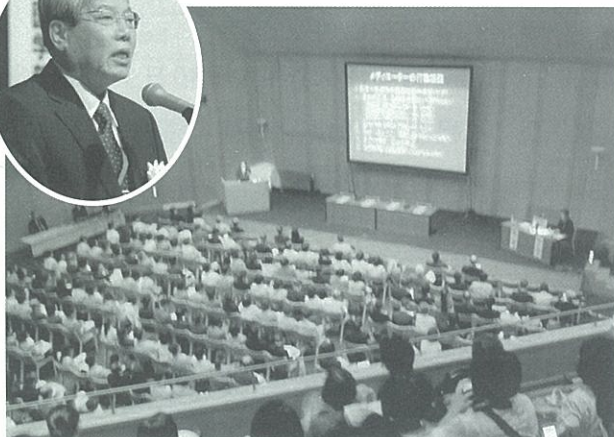
また、シンポジウムとしましては、「脳卒中地域連携クリティカルパス運用で明らかになった課題と改善にむけて」、「『医療決断』リスクマネージからクライシスマネージへの決断とその教育」、「専門職としての人材育成マネジメント—チーム医療を醸成するために—」、「NSTが目指す新たな栄養サポートシステム—施設間の垣根を越えた地域医療連携の構築—」の4題をおこないました。どの会場も、熱心な会員の参加を得て、活発な議論がおこなわれました。一部の会場では、入りきれない状態になり、参加の皆様にご不自由をおかけしたことをお詫びします。今回特に、人材育成や、教育に視点を重点に計画しましたが、時宜を得た企画であったと思えます。

2日目は、基調講演として宮崎久義理事長に「地域連携とクリティカルパスをいかに生かすか」と題して講演いただきました。第11回を迎える、学会の活動を中心にお話され、今後の拡充に向けて力強く決意を述べていただきました。

教育講演として、「看護の自律をめざして—ナースプラ



米倉正大 会長挨拶



会場風景